

俗つばい「海援隊」

大谷好雄

——新築地劇團十周年記念公演を観て——

新築地劇團は、その十周年記念公演として和

田勝一作「海援隊」を取上げた。これは嘗つて新國劇が上演したものの改作であると云ふ。改作であるなしかゝはらず、此の戯曲の持つ俗つばさは面白さと云ふ點には正しく不服はないが、新劇としては有難く頂戴出來かねる分子を含んでゐた。

友人と観乍ら語つたことであるが、

「此のごろの小劇場（築地小劇場のこと、東京に於ける新劇常打の小屋と云つてもよい）は客

がまるで變つたね」

五つ六つの子供連れの客から茶菓子持參のおばあさんまで、観客は激しき多彩を持つて來た。それは、殊に二大新劇團と自負する新協、新築地の場合に著るしい。

観客が各層に侵入することはそのみの面から言へば悪くはない現象だ。併し乍ら問題は劇團側が観客の多彩化に依つて、レパートリーの選定や演技その他まで、一つの掣肘を感じはじめてゐやしないか、或ひは意識さへしてゐるの

ではないかと疑はれるそのことである。新劇の職業劇團への身賣りと言ひ、俗化と言ひ、かう云ふ聲を聞くことは、其の現れかも知れぬ。又、これら二つの現象の相互作用は、あたかも、かの「反對物への轉化」の如く作用して行くのではないか。新劇の墮落へと。

肉を觀せんよりは骨を觀せよ。新劇は、その立場にのみ誇示し得るものを持つて今日まで來たのである。新協の「神聖家族」にしろ、今度の新築地「海援隊」にしろ、これらは骨を觀せんとして、實は肉を重視し、新劇の節操への巧みな裏切ではないか。かく言ふことは或ひは言ひ過ぎかも知れぬ。併し乍ら、最近藝術小劇場や文學座邊りに、骨ばつて肉たらずの感はあるが、新劇の正しき擔手があるのかも知れぬ。

x

海援隊、此の戯曲の持つ藝術的價値の強調が正しくなされたかどうかは怪しい。否、それよりも藝術的價値云々の言葉の方が奇妙に聞えるかも知れぬ程に此の劇は戯曲そのものに於て、已に大衆的作品であり、龍馬の不可思議な英雄的ゼスチエアの露出で終る。言つてしまへば心理的裏打がなされるまへに様式化が鼻につく。例へば、町人上りの海援隊士馬之助、長次郎に對する郷土出身の千屋、澤村の態度には海援隊士としての風格が感ぜられない。海援隊は少くとも先驅的集團であつた筈ではないか。これでは、町人上りの馬之助、長次郎は絶えず封建思想の亡靈に惱まされ居る状態であり、郷土上りの千屋、澤村の一團は封建思想の轍を抜け切らずごろつき然とし、龍馬一人が「近代日本の黎明を呼ぶ良き働き手として行動」したことになる。

つてしまふ。陸奥小二郎邊りに、ちよつとした
臭ひを感じぬでもないが、それにしては書き足
りない。戯曲を讀んでも感じたことだが、確か
に掘り下げが行はれてゐない。但しこれは、演
出如何と、俳優の役柄への理解によつてある點
克服出來ると考へるのだが、果してこの點に關
して嘗つての新劇人が持つた熱意ありや否や。

「町人であることに自負を持って」又、

「町人の前には武士は頭が上らなくなりつゝあ
る。俺なんか、町人にならうと苦しんでゐるん
だ」との意味を龍馬は馬之助に言ふが、かく言
はしめる龍馬の思想と、封建思想の亡靈に悩む
町人上りの長次郎、馬之助と、又その封建思想
に憑かれた郷士千屋、澤村との、此の三つの思
想——人間の動きと云ふものにはもつと心理的
描寫の追究に細心の注意が必要であつたのであ

らう。

あと味の残らないものは、一應すべて藝術的
價値を疑はれる。龍馬は第四幕第二場、即ち最
後の場に於て、長次郎の靈に對して十一發の禮
砲をうたしめる。それはその禮砲の下で、二つ
の階級に立つて人間本質を争つた、馬之助、千
屋に對して青天の霹靂であつたかと云ふに、一
應はさう感じられるが、又、見様に依つては、
見せ場の強調の意識化である。馬之助は龍馬の
心情に茫然として感泣し、千屋は抜いた刀を忘
れてなす所を知らず、龍馬は禮砲を聞き乍ら、
やれやれと云つた思ひ入れである。觀客もちよ
つと胸がすく。胸のすくのはよいが、その爲に
四幕七場、三時間半は長い。そして幕が切れる。
新劇と大衆劇との差は、觀客の感情を通して
理性へ一つの注人物を與へるか、又は喜怒哀樂

の感情を動かす程度で終るかに依つて定まる。

「海援隊」も一應は新劇臭くはあるが、その本質は大衆劇であると云ふより仕方がない。町人が叩きのめされるか、武士が崩壊するかと云ふスリルは持つが、スリルにとどまつて、そのスリルの呼び起す本質への究明が甚だ稀薄である。

新劇團のスターシステムへの地味なる轉化は又、それに拍車を掛ける。例へば善玉へは、名の賣れた巧い役者を、悪役や大人物の役ではあるが臺辭が一つ二つしかない役へは、まあ、その次邊りの役者を、と云ふ方法。若しも「海援隊」の場合に於ても、澤村、千屋の役へ、薄田、丸山級の役者を拉し來つたならば、或ひは俗味も幾分は削減し得たかも知れぬ。本庄の馬之助は「土」くさいの一言につきる。馬之助の性格から考へて、「土」の勘次を此處まで露出するに

は當るまい。

薄田の長次郎は町人氣質のしみこんだ饅頭屋上りとしては、あまりに巧みな變身でありすぎる。丸山の坂本龍馬は、ともかくも、今までの龍馬を解放した點を取る。その風貌も大いに役立つた。お龍になつた本間教子は普通だらう。「若しも山本安英がやつたら」といふ聲を聞くが、併しやつぱり大した差はないだらう。

千屋は一貫した性格を感じさせない。戯曲に於てさへ、あいまいな書かれ方である。

總じて登場人物の性格の概念性が眼につく。これは恐らく、決定的なものであらう。築地小劇場の様な四百人程度の收容能力しかない小屋では、おのづと演出も變らなければならぬし、戯曲に就いての検討も慎重にかゝらなければならぬ。餘程役柄への没我を計つても尙且、坂

本龍馬や長次郎、馬之助よりも、丸山、薄田、本庄が現はれてしまふ。

これでは五郎やエノケンと大差はない。

「丸山らしいとか、本庄らしいとか、やつぱり山本安英だ」と思はせる事それ自體に新劇の危機がある。

第二幕第二場寺田屋店先の後半と、続く第三幕第一场、長崎小會根家別邸に於ける場とに、劇的構成の面白さを幾分か感じたと言はう。第四幕第二場は戯曲を先に讀んだためか、丸山の演ずる龍馬の態度や、本庄の馬之助に芝居の厭さを豫感する様な氣分を受けた。禮砲と云ふ大芝居が用意されてあつたためかも知れぬ。

最後に、伊藤嘉湖の装置は相不變うまい。けれど、この巧さには不安もある。

ともかくも、新劇に骨が欲しい。否、新劇團

に骨が欲しいと言はう。

骨がなくての肉付けは、装置や俳優の技量をさへも變質せしめてしまふ。

俗化とは、かゝることの普遍化であらう。

詩 嗟 峨 野

韻へのエチユード

西日は異に美はしき
錦織りなし丘の上の
木末うらうら御れば
むらむら、紫、簀に

此の詩を故友伊東醫治の追憶に捧げる。

伊東は嵯峨野と唐招提寺とを格別に愛した。

二人は何度徘徊つた事であらう！去來の樂、祇王寺、小倉山、二尊院、大澤、廣澤―そこには思ひ出がこびりついてゐる。